

私立大学図書館協会東地区部会研究部
2010年度パブリックサービス研究分科会 第3回講義録

講義：「大学図書館員のスキルアップ」

講師：昭和女子大学大学院生活機構研究科・人間社会学部 教授 大串夏身氏

日時：2010年6月17日（木） 15:00-16:30

場所：昭和女子大学学園本部館 3F 中会議室

書記：撰、塩瀬

1. 図書館員が持つべき知識と技術はどのようなものか？

司書の専門性とは？ 司書の専門性に関する基準

日本では、図書館員の専門性を明示した公的な文書は、図書館法が制定された昭和25年(1950年)に文部省が都道府県教育委員会に出した通達「司書・司書補の職務内容について」だけだと思ふ。これは、米国図書館協会が作成したものを参考にして作ったもので、以後、日本では司書の専門性はこの通達の内容をもとにして語られてきた。最近では大学図書館界では大学の自己点検、自己評価との関係で、図書館の評価、図書館員の専門性の評価が問題となってきた。その一例として<参考資料>をあげることができる。

<参考資料>：図書館職員の「専門性評価項目」(東京大学図書館の司書評価用資料)

<http://www.ne.jp/asahi/tousyoku/hp/tosho/news0701a.pdf>

司書の専門性について、いくつか素朴な疑問をあげてみると――

①特定主題や主題全般に関わる知識あるいは技術は必要ないのか。

主題に対する知識・技術はどこで養成するのか？専門職養成機関はどこが担うのか？

アメリカでは、学部で教養を身に付け、院で専門性を獲得した職員が図書館にいる。

②図書館員の専門性はどのような条件があれば認められるのか。

大学図書館員は、教員やカリキュラムとの関係で、調査・研究と密接に関わることから専門職と位置づけられるべきである。=>この専門性は、参考資料にあげた「専門性評価項目」にはない。

③大学の教育・研究、カリキュラムとの関係を示す必要がある。

・参考資料に掲載されている業務のみだと、個別に業務委託やアウトソーシングすればよいということになってしまう。また、大学図書館員として、カリキュラムの研究は必要である。

・大学図書館員は、カリキュラムとの関係から学生とのかかわり、教員とのかかわりを明確化することが必要となる。

④広報・マーケティング

大学図書館・公共図書館の位置づけや、資料と利用者との関係が変わりつつある。大学図書館員としてもそれらを見据えた広報・マーケティング戦略を持つ必要があるのではないか。

⑤「読解力育成」の読書について考えるべき。

日本の子どもたちの読書は物語に偏り、幅広い読書が行われていない。大学図書館でも学生の読書推進を考える必要があるのではないか。

⑥知識の創造にかかわって

- ・大学図書館は、知の創造の場でもある。
- ・図書館員の知の創造に関する専門性が「専門性評価項目」には記載されていない。
- ・知識の創造に関わるサービス・業務をその専門性の中に持っていなければ、大学図書館員の社会的評価・必要性を失わせるのではないか。
- ・アメリカでは図書館員は「クリエイティブ・クラス」の一員である。ちなみに、美容師なども、創造的な仕事をしているという理由で、「クリエイティブ・クラス」に含まれるのではないかという指摘もある。
- ・図書館は利用者の交流の場として機能しているか？知識の創造のためには利用者の交流を促すことが求められ、図書館員はそのコーディネーターの役割も担うと思われる。

以上、大学図書館員の専門性に関するいくつかの疑問、つまり従来あまり議論されてこなかった事柄について、こんなこともあるのではないかと思うことをあげてみた。大学図書館は研究・教育の基盤と言われてきたが、これからは学生の学習を支援すると同時に知識の創造に関わる場であることも意識すべきで、専門性の評価の中にそうした項目も加える必要がある。

2. 図書館を取り巻く状況

- ・分野によっては、デジタル化がとてつもない進んだ。
- ・機関リポジトリにも進展があった。例えば、東大の修士論文は、学科にもよるが、公開されるようになってきた。国立大学（教育系）の機関リポジトリで充実しているものが見受けられる。
- ・デジタル化やネットワークの技術は図書館の可能性を広げた。ただし、様々な方法で知識・情報と利用者を結びつけることができればの話。さらに、IT 技術を活用して図書館の可能性を広げるためには、利用者を知ることが重要。

3. 大学図書館の方向

- ・大学進学者が大幅に増加した。高校での科目選択制の広がりもあり、基礎教養が欠如している学生が見られる。高校の教科書を大学図書館に置いておく必要があるだろう。
- ・読書活動の推進や自主的な学習活動のすすめにより、積極的に図書館を活用してもらえ

るよう働きかけている大学がある。

- ・大学院教育への対応も必要。社会人経由で入学した人たちは情報リテラシー教育を受けていないので、対応しなければならない(Googleは使えても文献を探せない院生が存在)。
- ・大学教育の変化に合わせて大学図書館のサービス構成も変えていく必要がある。

4. ふたたび大学図書館員の専門性について

- ・定型業務ばかりでは、ステータスが下がる。司書の労働市場はどうなるのか？これからの社会で認められる専門職は、年功序列や終身雇用の枠にあてはまらない可能性が高い。司書の資格制度が認知されるなら図書館を横断的に渡って行けるようになる(出版社の編集者的な渡り)。
- ・図書館員の大学内での位置づけは、今のままでは補助職務的な位置にとどまると考えられる。図書館に配属された場合、与えられた仕事をきちんとやるのが大切。図書館員としての知識とスキルは仕事のなかで身につける。それが、他の仕事に移動した際にも役立つ。
- ・自分がやりたいと思ってそれが実際に実現できるのは、10件のうち2~3件くらいあればいいというのが現実。やりたくない業務でもきちんとやっていかないと、誰からも評価されなくなる(与えられた仕事はやってみる)。
- ・根本的問題として、大学図書館を取り巻く状況の大きな変化がある。IT技術を使った方策に積極的に取り組むことは必須(新しい図書館利用の仕方・サービスの提案が必須)。
- ・サービス内容の再編に向けて、できることから、とにかく「やってみる」ことが大切。
- ・IT技術の普及・進展が新しい図書館のあり方を示す機会となると考えるか、図書館の利用が減少する要因になると考えるかによって、今から身につけるべきスキルの方向が変わってくる。
- ・利用されてこそその図書館。資料は活用されて社会的な価値を生む。利用者が図書館に来る仕掛けを用意する必要がある。
- ・資料保存

IFLAの指針が変わり、初心者でも扱えるものにシフトしている。

<http://archive.ifla.org/VI/4/news/pchlm-jp.pdf>

状況が変化すれば必要な知識・技術も変わってくるので、環境の変化がもたらす知識・情報の収集に努力することが大切。

- ・知識はいたるところから(企業のHPやセミナーなどからも)集めて、情報交換するべし。